



日豪EPAそしてTPP

天気が急変して春の嵐が襲うが如く、日豪EPA交渉が大筋で合意した。七年越しの交渉が決着とされるが、唐突感を免れえない。事情は明白であり、四月下旬のオバマ来日前での駐込み合意成立ということである。アメリカ産牛肉に対する優位性を確保したいオーストラリアの足元を見透かして、重要品目についてのアメリカの自由化圧力を緩和するところにねらいがある▼TPPはアベノミクスの成長戦略の最大の柱であるとともに、「TPP合意を妨げているのは日本」との国際的な批判を忌み嫌う。もともと日米同盟最優先からして、TPP拒否というカードは持ちえない。国会決議との間で、どの辺で手を打てば尻理屈が可能か、日豪EPAで刻みを入れて距離を見計らっている状況にある。それだけにオバマ来日の際でのTPP合意について、日本はアメリカ以上の強いこだわりを持つとみる▼日豪EPAでは、牛肉についてセーフガードを導入し低関税輸入枠を設けるとともに、冷凍牛肉で一八年、冷蔵牛肉で一五年かけて段階的に関税引下げをはかることによつて影響を最小限に抑えようとしている。それなりの交渉努力が払われたとはいえ、果たして時間を稼ぐことでうまく着地することができるのか。結局は責任を先延ばしして次世代にツケを回すだけではないか。原発を前提にしたエネルギー政策同様、危うい構造が見えて仕方がない。

(土着菌)